

高島靱之助 大正5年1月11日

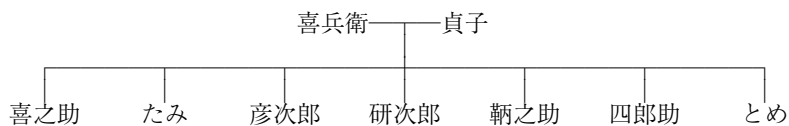
経済学部経済学科教授 三崎 一明

大正5年（1916）1月11日は、高島靱之助が京都伏見でなくなった日である。行年かぞえ73歳、満71歳である¹⁾。

大阪毎日新聞、大阪朝日新聞、京都日出新聞が、高島の訃報を報じている。そこで報じられた記事、高島に関する談話は高島を知るうえで貴重な史料である。三つの新聞の報道を通じて、高島の人となり、高島に対する当時の評価を探ってみる。

1

高島は7人兄弟である。高島は父喜兵衛、母貞子の4男として、弘化元年（1844）11月9日（新暦では12月18日）、鹿児島城下高麗町で生まれている。高島の兄弟は次のようになる²⁾。喜之助、たみ、彦次郎、研次郎、四郎助は早世する。名づけ方から推測して、彦次郎は満1歳になる前、かなり幼くして亡くなったとおもわれる。彦次郎の生まれ変わりとして、研次郎となづけ、さらには高島の弟を4男として四郎助と命名したのであろう。兄研次郎は明治元年（1868）に病死し、高島が明治元年（1868）6月1日、家督を相続している。四郎助は明治4年（1871）東京で流行したコレラで亡くなっている³⁾。



高島靱之助・春子夫妻もまた7人の子供を授かる。長女多嘉子（あるいは多嘉、たか）、次女志

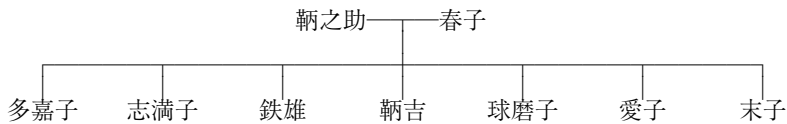
1) 稲村他編（1972）p.83。

2) 青山墓地の墓碑銘には喜兵衛、喜之助、彦次郎、研次郎、四郎助、たみの順序で記載されている。三崎（2012）pp.51-52、において「研二郎」としたが、墓碑銘に随って「研次郎」とする。

3) 橋口（1932 A）p.40。

満子、長男鉄雄、次男鞆吉、3女球磨子、4女愛子、5女末子と7人であるが、4人は夭逝する。

次女志満子は明治11年(1878)8月3日、数え4歳でなくなっている。長男鉄雄は、明治11年(1878)9月25日にジフテリアのため、数え1歳でなくなっている。次男鞆吉は明治13年1月12日、数え1歳でなくなっている⁴⁾。5女末子(満2歳11ヶ月)は明治22年(1889)1月12日、大阪で病気のためなくなっている。同年1月13日に葬儀を行い、阿倍野墓地に葬送している。会葬者が「頗る多く」、「近頃珍しき盛なる葬儀なり」と末子の葬式を報じた記事は結んでいる⁵⁾。



長女多嘉子は明治6年(1873)8月11日、麴町二番町で生まれ、昭和19年(1944)9月30日になくなっている⁶⁾。野津道貫の長女楨子(10月11日生まれ)と同年である。

多嘉子の経歴はよくわからない。『華族画報』には、学習院および大阪高等女学校に学びとある⁷⁾。『明治人名辞典』には、華族女学校出身とある⁸⁾。高島は明治18年(1885)から明治24年(1891)まで大阪在住である。のちに触れるようにこの間、多嘉子は高島とともに大阪で過ごしている。それゆえ、多嘉子は大阪府高等女学校に通ったと考えられる。

多嘉子の夫、高島(旧姓吉井)友武陸軍中将は、吉井友實の3男である。友武の姉澤子(万延元年(1860)4月14日生まれ、明治15年(1882)8月24日没)は大山巖の最初の妻である⁹⁾。また、友武の兄吉井幸藏の長男は歌人の吉井勇である。勇の弟友春(吉井幸藏3男、明治27年(1894)8月16日~昭和47年(1972)5月19日)¹⁰⁾が、のちに高島友武・多嘉子夫妻の養子となり、多嘉子の妹愛子の娘、初子と結婚する。しかし、昭和9年(1934)10月1日に離籍している¹¹⁾。

友武は慶応3年(1867)3月1日に生まれ、昭和18年(1943)5月25日に亡くなっている。『明

4) 大植編著(1971)p.121。高島家墓碑銘。

5) 『大阪朝日新聞』明治22年1月15日。高島家墓碑銘に記された命日は1月13日である。

6) 「多嘉子」としているのは高島家墓碑銘、天野編(1968)p.7、杉編(2011)下、p.1075、「多嘉」は霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)下巻、p.14、「たか」は稲村他編(1972)p.83、たか子は『明治人名事典』p.タ37が採用している。ここでは墓碑銘に従う。また、霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)下巻、p.14では、多嘉子の誕生日は明治6年6月16日となっているが、墓碑銘では8月11日である。

7) 杉編(2011)下、p.1075。

8) 『明治人名辞典』上巻、p.タ37。『華族女学校年報』、女子学習院編(1935)pp.72-86、いずれにも高島多嘉(子)の名前は記載されていない。

9) 霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)上巻、p.332。

10) 霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)下巻、p.823。

11) 霞会館華族家系大成編輯委員会編(1996)下巻、p.14。

治人名事典』によれば、友武は正五位勲3等を授けられており、経歴は次のようになる¹²⁾。

明治16年(1883) 陸軍幼年学校入学

明治18年(1885) 士官学校入学(士官学校生徒旧10期)

明治21年(1888) 歩兵少尉

日清戦争において、功三級金鷄勲章をさずけられ、日露戦争においても第3師団歩兵第6連隊第3大隊長(陸軍歩兵中佐)として、功三級金鷄勲章を受けている。

『明治三十七八年戦役実話 精神教育資料』に「剛毅なる大隊長」として、友武の活躍が記載されている¹³⁾。

中佐は子爵高島鞆之助の養嗣子にして、南山戦闘以来、大隊長として各所の戦闘に従事し、其指揮正確にして常に驍名を博せり。大石橋^{だいせききょう}附近の戦闘に於ては、七月二十四日夜、山西頭東方高地より、東部^{へんかんこう}邊汗溝西北方高地に向て攻撃し、同高地頂に於て敵と衝突し、茲に猛烈なる接戦は開始せられ、彼我入り乱れて格闘し真に劍戟相摩するの惨況を呈出せり。時に中佐は毅然前線に出でて、大隊を指揮し、毫も屈することなく戦闘を持続す、敵は遂に我猛烈なる攻撃に耐ゆる能わずして退却し、以て師団の戦闘をして有利に進捗せしめたり。又沙河会戦中、十月十四日、中佐は大隊を率いて、干家窪^{かんかわい}子の敵を奇襲し、熾盛なる敵の歩砲火の掃射する開闊地を直進し、敵の歩兵線を突破し、次で敵の砲兵陣地に進入し、其火砲十四門を鹵獲し、全く敵をして潰乱敗退に陥らしめ、余勇を駆りて終に沙河堡^{さかほう}を占領す。乃ち第二軍司令官は、其大隊に感状を附与し、以て武功を賞したり。(略)特に十月十七日、敵の沙河堡東北方に夜襲し来るや、時恰も暗夜、中佐は濫射せんことを顧慮し、単身敵弾雨注の間、散兵壕外に沿い、散兵の姿勢及び射撃方向を矯正しつつ大隊の全線を巡視せり。部下其剛胆に驚かざるものなく、士気益々激励し、遂に敵を撃退せり。以て其一斑を知るべし。

沙河は遼陽と奉天の中間地点にあり、会戦は明治37年(1904)10月10日~20日にわたって行われた。主な参加部隊は第1軍(司令官黒木為楨・参謀長藤井茂太、近衛師団、第2師団、第12師団)、第2軍(司令官奥保鞆・参謀長大迫尚道、第3師団、第4師団、第5師団、第8師団)、第4軍(司令官野津道貫・参謀長上原勇作、第6師団、第10師団)、総兵力12万8百名であり、日本軍の死傷者は約2万名に及ぶ会戦であった。

友武は、明治40年(1907)12月22日、第8連隊長に就任(在職1年5ヶ月)する。明治41年(1908)12月、陸軍大佐となり近衛歩兵第1連隊長に補される。

さらに友武の経歴をみる。

大正元年(1912)12月19日 近衛歩兵第2連隊長

12) 『明治人名事典』p.タ37。

13) 名古屋偕行社編(1909)pp.26-27。

大正3年(1914)3月5日 陸軍少将 歩兵第19旅団長(旅団司令部京都府紀伊郡深草村)

大正7年(1918)7月24日 陸軍中将 歩兵第19師団長(師団司令部朝鮮半島咸鏡北道羅南)

大正10年(1921)7月20日 予備役

大正2年(1913)5月1日現在、友武が近衛歩兵第2連隊長のとき、高島彌之助は近衛歩兵第3連隊付歩兵少佐である。大正10年(1920)5月1日現在、高島彌之助は関東軍司令部副官陸軍中佐である¹⁴⁾。

友武が陸軍少将となり、歩兵第19旅団長であったときに、高島は御大典参列のため京都を訪れ、友武の家に宿泊し、そこで幽明境を異にした。

2

大阪毎日新聞の高島訃報の第一報である¹⁵⁾。

噫、革丙將軍

革丙將軍の訃、突として伝わる、真に夢の如しというべきか。然れども、生者は終に死す、將軍齢七十三、亦天寿を全うせりというべし。唯將軍の累進して大阪鎮台司令官、第四師団長、陸軍大臣、台湾総督、拓殖大臣、枢密顧問官、子爵華族となれるの外、常に何等かの壯図を懐けるが□□、宛も嶠を負うの虎の如くにして、シカモ終に何事も為さずして逝けるの惜しむべしとするのみ。蛟龍雲雨を得ざりしによるか、雄心徒に粗豪にして、時代遙に進めるによるか。要するに薩閥勢力の一凋落、之と提携を期待したるもの亦失望に堪えざるべし。

官報も高島の死亡について報じている¹⁶⁾。

叙正二位 従二位勲一等子爵 高島鞆之助

綬旭日桐花大綬章 正二位勲一等子爵 高島鞆之助

枢密顧問官陸軍中将従二位勲一等子爵 高島鞆之助

特旨を以て位一級被進(二月二十日 宮内庁)

官吏薨去 枢密顧問官陸軍中将正二位勲一等子爵高島鞆之助は昨十一日薨去せり

高島訃報の詳細記事である¹⁷⁾。

14) 高島彌之助は高島の親戚であるが、詳しい経歴はわからない。

15) 『大阪毎日新聞』大正5年1月11日(夕刊)。

16) 『官報』(1916)第1031号、pp.132-133。

17) 『大阪毎日新聞』大正5年1月11日(夕刊)。

高島將軍薨ず

令息友武少将宅にて

突然の発病か

枢密顧問官陸軍中將子爵高島鞆之助氏は昨秋御大典に参列以来引続き其嗣たる伏見歩兵第十九旅団長陸軍少将高島友武氏の邸にあり老齡に似合わず元氣頗る旺盛なりしが昨十日午後に至り突然発病し出勤中の友武少将は三時頃急報に接し急ぎ帰邸看護に当りしが医師の手当功を奏せず十一日払暁遂に薨去せり享年七十三

病症は脳溢血

高島將軍は数日前下痢氣味にて臥床中なりしが九日夜突然病状の変化を來せしものにて急を聞いて堀部二等軍医馳せつけ治療に手を盡せしが終に効なく十一日払暁薨去されたり喪は十一日午後二時発表され遺骸は東京に送りて本葬を為す都合なるも其日時は尚お未定なり病名は多分脳溢血ならんと

豪傑風の

高島子

武人にして政治家肌

高島子爵は弘化元年鹿兒島に生れ初めより武人として世に出た、戊辰の役西南の役何れも大功あつて明治七年陸軍大佐、十六年陸軍中將、十七年に子爵を授けられた、十八年大阪鎮台司令官となり廿四年陸軍大臣と成つた、後枢密顧問官、台湾副総督、拓殖務大臣に歴任して再び陸軍大臣となつた、そして今尚枢密顧問官の職に在つたのだが政治から離れても隠然薩派の立物 として一角に重口を成して居た大阪に師団長たりし時脚氣に罹る兵士が多いので明治天皇に拝謁仰付られた時兵士に麦飯を食しむることを奏して御許可を得直に部下の兵士に麦飯を与えた、是が日本の

軍隊に麦飯 が用いられる様に成つた初めである、詩文をよくして革丙と名乗つて居たので革丙將軍と綽名されて豪傑肌の人ではあるが食物改良等の細かな事にも氣の附く人ではあつた、訪客を退けないで、一時千客雲集するの觀を呈したが

志士の出入 多くなり種々な処から誤解を招くので近頃は少し避ける風があつた。事業にも種々手を出したが多く失敗して借金もあつたが麴町紀尾井町の邸を賣つて借金を払い且儲けた事がある近頃

最も憂慮 していたのは支那問題であつて現内閣のやり方が良くないと云つて心配していた客に接しては諄々と語る方であつて「面白い話が聞きたければ大隈伯の処へ行け」と云つた調子であつた、麻布の屋敷には梅を植え牡丹を栽培して居たが花は咲いても賞する主は居なくなつた稍

艶っぽい逸話 として残つて居るのは余程前の事死んだ築地翫菊の女将洗髪のおつまつとして唄われて居た頃將軍の一人住の淋しさを察して故伊藤公が仲媒をして「おもしろい女が居るから

置いて見よ」とおつまをやった処がどうしたのか三日目におつまが逃げて帰ったような話があったおつまも今は故人だ將軍もまた世を去った噫

特旨叙位 枢密顧問官子爵高島鞆之助氏病氣危篤の趣天聽に達し十一日左の御沙汰ありたり

枢密顧問官陸軍中将

従二位勲一等子爵 高島鞆之助

叙二位□特旨を以て位一級被進) 綬

旭日桐花大綬章

高島氏略歴

高島氏は旧鹿児島藩士高島喜兵衛の四男にて弘化元年に生る、藩校造士館演武館に学び藩主島津久光に随うて上京後諸藩の志士と交遊せしが間もなく帰藩し奥小姓より教導となり戊辰の役には鳥羽伏見に戦い、長岡の戦いには咽喉部に銃丸を受けしもこれに屈せず全軍を指揮し遂に長岡城を陥る、明治二年召されて御親兵教佐となり尋で侍従を経て侍従番長となり先帝陛下に奉持しいたる同七年に陸軍大佐、八年に教導団長となる、偶西南の役起るや別働隊第一旅団長となり各地に奮戦して功あり次で陸軍少将に進み凱旋後勲二□旭日重光章を下賜さる、同十二年欧米に差遣され主として軍事上の視察を為す、同十五年朝鮮の事あるや黒田全権□使の副使として談判折衝大に努む、同十七年再び朝鮮に事あるや、上り三条公に説いて我政府の方針を確定せしむ尋で参議井上公に随いて同国に航し清兵の駐屯を撤退せしむ、而して同年華族に列し子爵を授けらるこれより先陸軍中将に進み西部監軍部長となり後大阪鎮台司令官、第四師団長等を経て同二十四年陸軍大臣に任ぜられしが在官中軍備拡張及び兵制改革に力を用い画策大に努むる所あり次で枢密顧問官、台湾副総督等を経て同二十八年再び陸軍大臣となり拓殖務大臣を兼摂す、同三十年末桂冠と共に再び枢密顧問官となり今日に至る享年七十三、嗣子は友武氏

京都衛戍病院は当時紀伊郡深草村にある。観月橋から北に3 km 位のところである。病院長は堀部禎二等軍医正である¹⁸⁾。また、引用文中に「詩文をよくし」たとあるが、この点は疑問である。革丙と名乗ったのは、たんに鞆之助の「鞆」を分離しただけのものである。

洗い髪のおつまは、当時有名な女性であり、お披露目の時に奈良原繁と偶然出会い、政官界の人々に紹介された関係からか、伊藤博文の庇護を受けるとともに、頭山満とも関係がある。高島と彼女とのかかわりは、妻春子がなくなる明治38年(1905)10月から、伊藤博文が暗殺される明治42年(1909)10月の間、4年間の出来事と推量される。おつまは明治7年(1874)生まれなので、おつまがかぞえ32歳から36歳の間である。伊藤の紹介で高島のところに行ったのではなく、妻のいない高島の面倒を見る女性(おそらくは後妻格)としての話があって、紀尾井町の邸に赴いた

18)『職員録』(甲)大正4年、p.495。

と、おつまは話している。その際高島のところに行くかどうか決心がつかずに、伊藤に相談している。その結果、行くには行ったが、1か月ばかりで紀尾井町の家を出ている。理由は、芸者という稼業になじんだ結果、主婦稼業は務まらなかったということである。とくに長女多嘉子との折り合いが難しかったと話している¹⁹⁾。友武が近衛歩兵第1連隊長に補されるのは、明治41年(1908)12月である。長女多嘉子が高島と同居したなら、これ以降である。おつまが高島の家にはいたのは、明治42年(1909)前後ということになる。おつま34、5歳の時である。

引き続き、高島の解説記事を掲載している²⁰⁾。

大隈伯の一敵国

逝ける高島將軍

薩派の重鎮として政界に多大の潜勢力を有し居たる高島將軍は薨ぜり將軍は晩年枢密顧問官として直接政治に与らず自ら隱居と称し訪客に対しても政談を避け居たれども其多年政界に扶植せる潜勢力は尚衰えず政変起る毎に將軍の名は世間に現れ薩派にして将来勢力を盛り返すに至らば高島内閣の樹立を見るべしとの予想も全くの風雪にはあらざりき久しく不遇の地にありし薩派は山本伯の蹶起により一旦勢力を挽回したるも海軍取賄事件の爲蹉跌を來して悲惨の最後を遂げ薩派の勢力は又復沈衰するに至れり大先輩に松方候ありと雖も元老の株を嬰守するのみにして政界に勢力なく僅に高島將軍の在るありて一縷の望みを繋ぎ居りたるに今や將軍を失い愈々薩派の凋落となり同派政客の失望想像に余あり將軍は生來大隈伯と善からず常に伯が大言壮語して実行の伴わざるを非難し居り政治上の意見についても大隈伯と反対にて殊に支那問題については極力現内閣の施設を排し自ら早稻田邸に大隈伯を訪問して親しく忠告を試みたる程なりき又た枢密院に於ても非大隈派として政府に憚られたる將軍は政党に対しては国民党に同情を寄せ犬養総務の人格を推奨して止まず世間往々犬養氏が薩派と連絡ありなど、伝わるは此辺の消息の洩れたるものならん而して晩年に於ける將軍の勢力は松隈内閣当時の如くならざれども尚一片の雄心勃勃として禁ずべからざるものあり他日政機一転して風雲乗ずべきものあらば老骨を提げて政界の革新を計らんとするの意なきにしもあらざりしが今や將軍は不歸の客となり復其雄偉の音容見る能わず大隈伯は定めし一敵国を失いし感あらん將軍が日夜憂慮して措かざりし支那問題は未だ適當の解決を見るに至らず又欧州の大戦乱も何時終局を見るやも知れざるの状勢にあり思うに將軍が最後の一念は茲に止りて雄魂安かに眠る能わざるものあらんか

ついで高崎親章、川勝歌蝶の談話が掲載されている²¹⁾。

19) 己黒子(1910) pp.142-145。おつまの写真は、小沢(1997) p.310、に掲載されている。

20) 『大阪毎日新聞』大正5年1月12日(朝刊)。

21) 『大阪毎日新聞』大正5年1月12日(朝刊)。

逝ける革丙將軍

豪放にして淡泊

なりし高嶋子爵

私欲に浅き將軍の資性 紅灯 = 緑酒

の間にも残る往事の逸話

陸軍中将子爵高嶋鞆之助氏薨去の事は夕刊所載の如なるが同氏は昨年十一月入洛後長女多嘉子の愛婿なる歩兵第十九旅団長高嶋友武氏の邸に滞留中十日午前四時頃急に激烈なる胃痙攣を發し翌午後二時過ぎ遂に脳溢血を發して薨去せるものにて十一日午後二時喪を發せられたる次第なるが女婿樺山資英氏夫妻其他協議の末葬儀は青山祭場に於て神式を以て執行すべく遺骸は二重作りの寢棺に収められたるが十二日午後一時十三分桃山発列車にて高嶋、樺山両夫妻付添い東京麻布筆筒町に送るべく同列車は二時五十六分京都駅通過十三日午前七時五分東京駅に着すべし、なお山県元帥、岡陸相、上原參謀総長、吉井伯其他よりの甲電訪客引も切らず旅団副官等数名の將校同邸に詰切り大多忙を極めつゝあり

私欲に淡い人

親しく故將軍を知

れる高嶋親章氏

高嶋親章氏は薨去せる高嶋鞆之助氏の事につき深き感慨に打たれたる如くにて語って曰く私も御大令中京都で逢った切りだがその時は中々元氣であったがどうもわからぬものだ私は常に知遇を受けて居たが子爵は鹿児島生れで頗る普通人と異った人である大阪に師団長としていた時内閣が変わったので陸軍大臣となったがこれが子爵が今日に及んだ或る運命の岐れ路であった、其時大臣にならず武人で居たならば侯爵位には必ずなった人である、子の性質は一口に云えば豪放で更に利欲がなかった、我物は人の物だと称して如何に自分が好んで居るものでも人が好むと云えば惜げもなく与えて了うた人である、其私欲のない一例を云えば、嘗て私が刀劍好きだと言ったら子爵が野津に行つて言えば正恒の銘刀を呉れるから取つて来いと言われて貰った事があり今でも私の宝となつて居る

歌蝶の初ての旦那

忘れてならぬ大切

な恩人だと語る

故高嶋將軍は祇園に嬌名を唄われたる芸妓川勝歌蝶が未だ舞妓にて三代鶴と名乗つて居たる十四の春の初めての旦那なり、歌蝶の三代鶴が西郷侯や松方老侯に寵愛されるようになったのは全く將軍のとりもちに依るものにて歌蝶の為には將軍は忘れ難き恩人なり將軍薨去の報を齎して歌蝶を訪えば吃驚して語る

高嶋サンは妾の為には大切な恩人です、高嶋サンはもと妾の姉芸妓池鶴のおまさサンとは相惚とでも云う仲でした、処が今から二十五年前大阪の師団長から陸軍大臣にご榮転の時丁度おま

さサンは大阪のお客に落籍されることになったので其後妹分の私が……其時旦那が東京に立たれる際祇園石段下で御土産に狎を買って箱に入れて中村楼の玄関で私と狎と一緒に東京に連れて行くと仰しだったので私が泣いて逃回りますと旦那はんは大きな口を開いて笑うて居られましたと今昔の感に堪えざるものゝ如し

高崎親章は、政治家としての高島よりも、軍人としての高島を高く評価している。
高島の葬儀についての記事である²²⁾。

高島將軍の遺骸

故高島將軍の遺骸は伏見觀月橋畔なる令嗣友武少將邸樓上に於て十二日午前十時納棺、正午同邸を出て桃山駅に向えり前夜来只一門の遺族が通夜せしのみにて別に棺前祭とてもなく総ての祭儀は

東京着の上 正式に執行せらるべき筈なれば此日は只寢棺を黒布にて覆い歩兵第三十八第五十三兩連隊將校団一同の寄贈花環神戸大紀商會の花輪を棺上に供えたるのみにて万事いと質素に少將も通常礼装のまゝ夫人と二令嬢を伴い樺山資英氏夫妻と共に棺後に従い大久保大阪府知事、山田保永中将、日高海軍大將夫人其他親族知己を始め庭前に堵列せし麾下の將校数十名列に加わりたり斯くて

桃山駅に到着 すれば予め準備せし貨車に棺を移され少將等一門棺側を侍し松川師団長夫人以下数名師団幕僚限部五十三連隊長各特科隊將校三根憲兵隊長高木紀伊郡長其他官民多数の見送りを受けつゝ午後一時十三分發車せり京都駅にては大森知事折田貴族院議員井上京都市長大野市参与其他鹿兒島出身者多数の見送りありたり

引用文中の松川師団長とは第十六師団長松川敏胤中将のことである。当時の五十三連隊長は限部又雄歩兵大佐であり、五十三連隊は奈良市高畑に駐屯していた。京都憲兵隊長は三根昇一憲兵中佐であり、京都憲兵隊の所在は紀伊郡伏見町である²³⁾。高木謙二郎京都府紀伊郡長、大森鐘一京都府知事、井上蜜京都市長、大野盛^{もりか}都京都市参与（京都市事業部長）である²⁴⁾。

「伏見觀月橋畔なる令嗣友武少將邸」と記事は述べている。したがって、高島友武の住居は觀月橋のちかくと推測される。このことは京都日出新聞においても確かめられる²⁵⁾。

高島子薨去

-
- 22) 『大阪毎日新聞』大正5年1月12日（夕刊）。
23) 『職員録』（甲）大正4年、p.491、p.494、p.306。
24) 『職員録』（乙）大正4年、p.59、p.63、p.76。
25) 『京都日出新聞』大正5年1月12日。

枢密顧問官陸軍中將高島鞆之助子爵は大典參列の爲入浴後其養嗣子たる第十九旅団長高島少將邸(伏見觀月橋畔)に、滞在、七十三の老体に拘らず頗る健康にて毎日附近を散歩などせしが九日夜突然胃痙攣を起し十日正午頃危篤状態に陥り十一日午後二時遂に薨去せり危篤の報天聽に達するや正二位に叙せられ旭日桐花大綬章を賜り又十一日午前兩陛下の御使として京都主殿寮所長日之西資博氏同邸に赴かれ御見舞として御菓子一折を賜たりと尚遺骸は納棺の上十二日桃山駅を發し東京に於て日を定め葬儀を営むべしと

大正5年(1916)、友武は歩兵第十九旅団長であり、旅団司令部は京都府紀伊郡深草村にあった。歩兵第十九旅団は第十六師団に所属している²⁶⁾。師団司令部と旅団司令部は約2km離れている。

その後、昭和7年(1932)にも友武は京都深草村在住で、家は「師団司令部の前」²⁷⁾にある。師団司令部とは、当然第十六師団司令部である²⁸⁾。さらに、「元は練兵場に打続く原野であったらしく、庭前眼を遮るものなく」とあるので、第十六師団司令部の前だと確信させる。さきの住居が觀月橋附近であれば、伏見町あるいは堀内村である。友武は、高島が最後を迎えた住居から、北3km近くのところにあらたに居を構えたことになる。

友武は、昭和7年(1932)には文鳥を飼育していた。竹にも趣味があり、竹製の杖等を製作している。また、ゴッホと同じく自然石(鳥の形をしたもの等)を蒐集する趣味があったようである²⁹⁾。

さきの記事において、「日之西」資博とあるのは、宮内省主殿寮出張所長日野西資博のことである。

大阪毎日新聞の続報である³⁰⁾。

故高島子爵遺骸を東京に送るべき事は夕刊所報の如くなるが親族砲兵大尉野津鎮之助氏は十一日夜伏見に到着し葬儀其他の準備の爲十二日先發にて帰東せり葬儀は多分十五日執行さるべしと

野津鎮之助は高島の甥で、野津道貫と登女子の長男である。このとき近衛野砲兵連隊附の砲兵大尉である。高島の棺が東京に到着した時の様子である³¹⁾。

高島氏遺骸着京

26) 『職員録』(甲)大正5年、pp.495-497。

27) 月亭生(1932)第13年、4号、p.14。

28) 京都市(1975)附属地図参照。

29) 月亭生(1932)第13年、4号、p.14。

30) 『大阪毎日新聞』大正5年1月13日(朝刊)。

31) 『大阪毎日新聞』大正5年1月13日(夕刊)。



十五日午後二時
青山祭場にて神葬

枢密顧問官高島鞆之助子の遺骸は十三日午前七時十分東京駅着汽車にて着京樺山、清浦各枢密顧問官、大迫学習院長、長崎宮中顧問官、松方幸次郎氏其他朝野の名士百五十余名出迎えあり遺骸は直に馬車にて麻布筈箭町の邸に入りたるが葬儀は来る十五日午後二時青山祭場にて神式に依り執行する由

高島の葬儀の模様である³²⁾。

高島中将葬儀 子爵陸軍中将高島鞆之助氏葬儀は十五日午前十時霊前祭を行い嗣子友武少将を始め家職親戚の拝礼あり終って霊柩は途中行列を廃し青山祭場に護送し午後二時神式に依り執行し齋主の誄詞朗読あり次で喪主友武少将を始め家族親戚野津鎮之助候、吉井幸蔵伯、樺山資英氏並に友人総代山縣、大山、松方各大勲位其他枢密顧問官陸海軍武官数十名玉串を奉仕し儀仗兵二個大隊の弔砲発射中に埋葬したり

記事中の吉井幸蔵は吉井友実の長男で、友武の兄である。高島の葬儀に際して、勅使として侍従落合為誠が派遣されている³³⁾。

勅使差遣 一昨十五日故枢密顧問官子爵高島鞆之助葬送に付午前十時勅使として侍従落合為誠を同人邸に差遣はされ幣帛を下賜ひたり

これについても、大阪毎日新聞が報じている³⁴⁾。

御下賜 畏き辺にては十五日午前十時勅使として落合侍従を麻布筈箭町の高島子邸に遣わされ左の通り御下賜相成りたり

一金五千円 祭糝料

一紅 白 絹 二 匹

3

つぎに大阪朝日新聞の記事をしてみる³⁵⁾。

32) 『大阪毎日新聞』大正5年1月15日(夕刊)。

33) 『官報』(1916)第1035号、p.234。

34) 『大阪毎日新聞』大正5年1月15日(夕刊)。

高島靱之助子 高島靱之助將軍は女婿なる伏見桃山の歩兵第十九旅団長高島友武將軍の邸に於て十日正午腦溢血に罹り危篤に陥り種々手当を加えたるも遂に十一日午後二時薨去せり子は旧鹿兒島藩士高島嘉兵衛氏の四男にして弘化元年十一月鹿兒島に生れ文久二年藩主に扈從して禁裏守護の大任に當り戊辰の役に勲功あり明治三年侍從に任ぜられ次で侍從番長となり同七年陸軍大佐に任ぜられ爾來累進して同十六年陸軍中將に陞り次で子爵を授けられ大阪鎮台司令官及び第四師団長を経て二十四年陸軍大臣に任ぜられ後樞密顧問官、台灣總督、拓殖務大臣の諸官に歴任し再び陸軍大臣の要職にありし事あり

引用文中の高島「嘉」兵衛は誤りである。正しくは、喜兵衛である。また、高島を4男と報じている。同じ紙面に次の記事が掲載されている。

高島子陞叙 高島靱之助子京都に於て危篤の旨天聽に達するや十一日左の如く特旨叙位並に叙勲の御沙汰ありたり

樞密顧問官陸軍中將

從二位勲一等子爵 高島靱之助

叙二位(特旨進位) 綬旭日桐花大綬章

床次竹二郎の談話を含む続報である³⁶⁾。

薨去せし高島將軍

臨終の模様 退役陸軍中將高島靱之助氏は昨年十月上旬より嗣子歩兵第十九旅団長高島友武少將の宅に滞在し御大典參列後少將の寓居が伏見桃山に近き高台にありて山水明媚且氣候温暖なるを愛し今日まで帰東せざりしが十日朝四時より胃痙攣を起し苦悶甚だしきを以て京都衛戍病院長堀部二等軍医正の來診を乞いしが注射にて稍安静を得たるを以て午前八時頃衛戍病院長も其のまゝ、病院に引返し高島旅団長もさしたることはあるまじとて平日の如く旅団司令部に帰営したり然るに午後十二時頃病氣急変し昏睡の状態となり午後二時頃危篤に陥りたり十一日午後一時半正二位に叙せられ旭日桐花大綬章を賜り兩陛下より病氣御見舞として菓子折一折を賜りたるが同二時遂に薨去せり病氣危篤なりと聞いて岡陸相、松方侯爵其他親戚より弔電引きも切らず東京よりは急電に依つて親戚親近者十一日朝伏見高島家に着したるが遂に藥石功なく子爵は薨去せしを以て何れも悲嘆に暮れ居たり弔電を送りたる主なる人は岡陸相、松方侯、有松樞密院書記官長等薩州の人々多かりき將軍夫人は既に亡く嗣子高島少將は將軍の長女の婿にして二女は樺山資英氏に嫁し尚他に一女あり將軍行年七十三遺骸は十二日正午同邸出棺後午後

35) 『大阪朝日新聞』大正5年1月11日(夕刊)。

36) 『大阪朝日新聞』大正5年1月12日。

一時十三分桃山駅発二時五十六分京都駅通過十三日午前七時五分東京駅着の筈
高島子発病は突然 將軍は昨秋御大典參列の爲入洛されて以来同邸に滞在し一日觀月橋畔を
散策する位に時を費し外出すること余り多からず常に家庭にありて開闊の談話をなし家内を賑
し居たる程にて九日までは何等の異常もなかりし十日に至り俄然発病せしものなりと
床次竹二郎氏談 高島子が政界の裏面に立ちて活動せられたる頃は余は田舎廻りを爲し居り
たれば一向其時の事情を知らざる其後東京に出で来るに及び始めて東京の先輩として時々其門
を敲き親しく接見するの機会を得たり薩長の先輩は多く其風采堂々たる裡にも子は殊に風貌魁
偉一見人をして感服せしむるの概あり悪くいえば傲岸不屈とも見るべきが又眞に偉丈夫たるを
失わざりき而して時事問題に関する子の意見の如きも常に大局に着眼し高所より立論せられ傾
聴すべきもの甚だ少からざりき若し子にして順当に進み居られたらんには西郷、大久保の衣鉢
を継ぐべき人にして必ず一度は内閣の首班に列せらるゝ事ありしならん否今後と雖も必ずしも
絶望ならざりしのみならず今日の如き沈衰時代には子の如き活発果斷の人を要する事最も痛切
にして若し子にして内閣を組織せられんか其の平常の氣質に徹し敵を作る事も多からんも必ず
百般の施設の上に思い切つたる改革を爲し遂げ天下の耳目を新にする機会もありしならんに今
や卒然として館を捨てられたるは惜みても尚余りあり子は大阪師団長当時より已に高島將軍と
して雷名を天下に轟かしたるも而も子は軍人としてよりもより多く政治家としての素質を具備
し居らるゝが如く殊に政党の首領などには得易からざる適材なりしなり云々

床次竹二郎は、軍人としての高島よりも政治家としての高島を高く評価している。さきの高崎親
章は、これとは逆の評価を下している。

1月12日の「天声人語」である³⁷⁾。

高島中將の訃によって、明治史上の人物が又一人減つた▲中將は明治十四年に今の曾我祐準男
の後を襲うて、大阪鎮台司令官となり、鎮台が師団になつた第一の大阪師団長は矢張高島中將
だつたというから当地には縁の深い將軍だ▲今の奥大將などは当時同將軍の下に旅団長だつた
ものだ▲明治十二年に佛国へ行つたりして、軍人としては、獨逸派全盛に先つ仏蘭西派の殿將
たる觀があつた▲政治家としても、奈破翁三世の影響を受けて、乱世の梟雄の俤があつた▲
夫れが爲或る水平点以上に發達の出来なかつたのは是非がない▲晩年に及んで桂内閣の崩壊当
時、昔取つた杵柄を擔いで死花を咲かせる心算だつたが、権兵衛にほじくられて種無しになつ
た爲結句晩節を傷つけずに済んだ訳だ▲西南戦争當時に、敵に追詰められて切羽詰つた時、無
数の銀貨を敵中に振り撒いて、敵がソレも欲しい、將軍も逃したくないと迷っているうちに逃
げたおせたという話がある▲後年、鶏鳴狗盜の雄と唱われたのも、政界に此の流儀を応用しよ

37)『大阪朝日新聞』大正5年1月12日。

うとしたからかも知れない▲唯自ら信ずる事極めて深く、猥りに人を許さなかった点は、將軍をして志を為さしめなかった原因であると同時に、將軍の將軍たる所以であった(略)。

西南戦争のエピソードが伝えられるが、その真偽はわからない。

1月12日の7面である³⁸⁾。

大阪鎮台時代から

第一次の四師団長までの高島將軍

故高島將軍と大阪とは特に深い関係がある大阪鎮台へ司令官として来たのは明治十四年の二月で当時は少將司令官としては五代目に当る翌十五年二月職を去り更に十八年の五月鎮台の制度が廢せられて始めて第四師団と改稱せられた時既に中將に進んでいた將軍が第一次の第四師団長として来任した奥元帥はその時部下の旅団長であった

華美の遊び

肴は薩摩汁と目刺

性極めて磊落で師団へは一週間に二度位しか出ない事があり又殊の外の派手者の事とて一月八日の陸軍始めには觀兵式後は偕行社へ市内公私の百官を集めて豪華な盛宴を張った事などは今も話の種になっている万事がこの調子で北の新地や難地あたりで大分豪遊を極め北での宿坊は西郷(従)三好、野津、奥などの將軍がよく行く「千原」であった「千原」の女將おうめ(五十九年)は訃報をもたらした記者にハンケチで眼をおさえて語る

一昨年の五月東京へ参り

まして奥元帥様のお屋敷へ

伺いました時丁度高島様が自動車で今お帰りという処で窓越しにお顔を拝見して思わず声をかけますと「オ、おうめか来たね」と笑ろてでしたが今思えばそれがお別れでした左様でございます私共は丁度明治十四年の大阪鎮台の時から永々一方ならぬ御鼈頂に預かっていつもお宿坊になっていました賑やかな事がお好きで派手なお遊びもしてゐましたがとり分けて御鼈頂になった芸妓は北では久龍南ではお玉位のものでこれも気まぐれ、別に女はんをどうするというよりもいつも若い妓を大勢狩り集めてキァキァいわして喜んでやりましたその頃の仲間で見残っているのは

林のおゑんさんおかつさ

んに佐藤のおくにさん位い

のものでしょう妾はその頃は二十四五歳でしたが始終肥後橋のお屋敷へうかゞいましたお屋敷は今の加島銀行のある処でとりわけご隠居様(母堂)に殊の外お気に入りましてよく琴の相手

38)『大阪朝日新聞』大正5年1月12日。

をしました御隠居様や奥様も大変お気の好いお人でよく妾共へも御夫婦で御隠居様を連れて遊びにお越しになり罪のない事をしてお遊びになったものです

三好さん（第三次大阪鎮台司令官）は恐いお方高島さんは誠に気のおけないお方でついぞお腹立の様子を見た事はありません派手なお方のくせ御馳走するのが大変お嫌いで大抵

いつも薩摩汁に目刺して

お酒を召しあがってました

碁と刀剣が何よりもお好き出入の商人が珍しい刀を集めて朝からそれを見いみいしてはご飯もお上りになりませんので私共も勝手に頂戴するわけには行かず随分ひもじい思いをした事は幾度もありました、大阪でのお宿坊では私共の外には南の「中ゆき」という家がありましたが大抵はこちらから芸妓を連れてお邸へ参る方が多うございました旅館では北浜の今の株式取引所の処にありました専崎を一番御最良でしたが廃業の後は花房や花外楼へお越しになり殊に暮に亡くなりました花房のお鈴さんはとりわけ御懇意でした

祇園で二度失敗

十一日薨去した高島将軍の大阪師団長時代には土曜日から日曜にかけて京都へ遊びに来ていつでも祇園の

万亭で豪遊 を極めたものであった将軍の最良を受けた祇園の美人も少なぬ中に現に祇園の末吉町池鶴の女将に居る祇園

評判の美人 池田まさはまだ芸妓であった頃特別に将軍の御最良を受けて一時は将軍に落籍さるゝとまで伝えられた程温かい情交であったがおまさは大阪の木綿問屋澤田佐吉氏に落籍されてしまったので

将軍の愛は まだ其の頃三代鶴の名で唄われて居った川勝歌蝶の方へ移った又歌蝶も但馬の二ツ引大盡に落籍されたので又もや失望を重ねた

この記事によって、いままで詳細がわからなかった高島のことがかかりわかる。まず、高島がかなりの派手好きであったことである。師団に週1、2度しか出ないことがあり、しかも土曜日、日曜日には京都に遊びに行くとのことである。このあたりが、高島は公私を分別できないと批判された理由であろう。

第四師団長時代の高島の居宅は、土佐堀にあった。大正4年の加島銀行の所在地は大阪市西区土佐堀通1丁目であり、極めて肥後橋に近いところである。しかも、当時、高島は妻春子だけではなく、母貞子とも大阪で暮らしていたことが伝えられている。当然、子どもたちも一緒に大阪で暮らしていたことになる。したがって、子どもたちは大阪の学校に通っていた。さきにみたように長女多嘉子は大阪女学校に通ったようである。

また、橋口の伝記では曖昧であった高島の女性関係が³⁹⁾、ここでは大阪ではだれ、京都ではだれ

39) 橋口西彦 (1932 A) p.42。

と明確に語られている。

疑問点がある。高島師団長が、お酒を飲んだというくだりである。この記事によると高島はお酒を一滴も飲めないのではなく、少しは飲めたということになるが、樺山資英は、お酒は飲めないと明言している⁴⁰⁾。高島はお酒を少しも飲めないことは間違いない。このことは後に触れる。したがって、おうめの記憶違いである。あるいはお酒の練習をしていたのかもしれない。

碁と刀剣については、食事を忘れるくらいとあるので、並々ならざるのめりかたである。さらに、音曲好きの母貞子は琴の演奏もできたということである。

高島のお酒について、京都日出新聞に九鬼男爵談話が掲載されている⁴¹⁾。

高島將軍の訃を聞いて九

鬼男爵俵屋にて語るく

□高島將軍 は軍人としては実に古参で、今の山県大山両公よりは少しく後進であろうが、其他に比しては先輩である、夫の十年戦争の時には、樺山さんや乃木さんなどは慥か中佐位であったと思うてるが、高島將軍は其時既に少将であった、陸軍大臣当時などは、能く閣僚と衝突して激論を闘わしたもので、当時の首相伊藤公などにも能く突かゝったもので、伊藤公などは、高島は大臣になってから、陸軍省に顔出したのは、タツタ四日丈であるのに、能く理屈ばかりは言えるものなど、言うたこともあった、併し其邸宅には、毎日朝から沢山の来客があって、何時行って見ても二三十人の客があったものだ、そして其来客の顔触れは、実に種々雑多有謂階級を網羅したもので、軍人もあれば、政治家もある浪人もあれば官吏もあると言うた風で河野広中氏や犬養氏などの顔も時々見えたものだ、唯だ学者といった風な側の連中は少い様であった

□そこで拙者 は一度斯云うたことがある、あんたの宅には上は聖賢から下は泥棒火つけの果てまで来ると、戯談話したことがあった、拙者は五十年近くも官吏生活しているが未だ曾て高島さん程胆の大きい人を見たことがない、其奥底がどの位深いか、一寸も量り知ることが出来なかった、又性質も非常に美しく晴朗珠の如き人であったが、忌憚なく短所を言えば、裏面の克己勉励と細心の注意が足らなかったと思う、所謂氣天を呑む概はあっても、細心の注意を欠くと大成功は六ツかしい、高島さんなども陸軍大臣、拓殖務大臣を最後として全く政界を遠かって了ったのも、要は此点にあると思う

□余談 に渉るが、豊太閣などは細事に拘泥せぬ大ざっぱな豪傑の様に世間では思うているが仲々そうではなく朝鮮征伐前に朝鮮語と日本語とを比較して字引の様なものを自筆で書いてるものが今日でも残っている、又奈翁なども少時は盛んに悪太郎を極めたものであったそう

40) 樺山資英伝刊行会編(1942) p.630。高島軻之助謹話(1912) pp.33-34において、本人も酒量は「浅い」と断言している。

41) 『京都日出新聞』大正5年1月12日(朝刊)。

が、夫でも時々陰に隠れて地図を繙いて居たものだそうだ、奈翁の最後はア一言う風になったが地理上に於ける失敗は皆無であったとのことである、由来英雄豪傑と世に唄われる、人物の裏面には斯くの如く細心は潜んでいる

□高島さん は別段之ぞと言う組織的の学問をしたことがないが、夫で仲々頭脳が透明で、演説はあまり上手ではなかったが、座談となると、政治上の事は勿論社会一般のこと、能く知って居て上手に話されたものであった、又人物を観るの明があった、之に就いて斯云う事がある、伊藤公が首相で、大山公が陸軍大臣、井上毅が文部大臣の時であった、当時高島さんは多分閣外に居られたと思うてるが或時拙者に向って、井上が文部大臣では一寸心細い気がする、次で牧野（伸顕氏当時茨城県知事）を次官にしたらどうかと思う、幸い君が伊藤とも井上とも懇意だから一ツ推薦したらどうかとのことであった、そこで拙者も成程と賛成し、先ず井上さんに説いたら喜んで賛成して呉れる、夫から伊藤さんに言ったら、案の定、伊藤さんは私には異存はないが、多分大山公が異議を唱えるに相違ない序に大山さんを説つけて呉れとのことであったから、其足で直ぐ大山さんに言ったら、案の定大反対、牧野の如き無学者に文部の次官はつとまるものか、夫よりは大学校の一年生がい、だろうと、テンで相手にせぬ、がいろいろ説いた結果、大山さんの言うには夫れなら君が持つてる狩野永徳の靈昭女の軸を吾輩に呉れる、そんなら賛成してやると言うから、夫程お望みなら大事の家宝であるはあるけれど、人材出世の為に喜んで差上げましょと、そこで相談一決し其結果牧野さんが次官になったことがある併し夫は約束丈けで、永徳の画は先方から取りにも来なかったし、又拙者の方から持っても行かなかったし、靈昭女は依然として拙者の宅にある、之は高島さんとは直接でない様だが、故人が人物を観る明があったと言うホンの一例として談して置く、高島さんは生来一向酒を用いなかったが夫で仲々酒席は上手であった、まだ夫程の年でもないのに誠に惜しいことをした、故人に関することを談すと、仲々尽きぬが、今度はマア之位にして置こう

九鬼男爵とは、九鬼隆一のことであり、かつて文部次官を務めたことがある。九鬼周造は隆一のむすこである。九鬼は「高島さんは生来一向酒を用いなかった」と高島がお酒を飲めないと断定している。

さきにみたように高島が第四師団長の時には、週に1、2回しか師団本部に顔をださいと伝えられるが、大臣として陸軍省に顔を出したのは4日だけという伊藤の言を伝えている。

さらに、高島の学問について重要な指摘をしている。高島は「組織的」な学問をしていないという点である。この点については、すでに別の稿で触れている。高島はおそらく郷中教育で基礎的な知識をえたのち、野津、大久保、西郷、吉井、中井弘等との触れ合いを通じて、独学で学んだものが多いと思われる。

牧野伸顕は大久保利通の次男である。大山の牧野に対する評価が九鬼の談話のとおりなのか、高島と大山の大久保利通に対する評価の違いにつながるのか興味のあるところである。

京都日出新聞の続報である⁴²⁾。

革丙將軍蜜柑を失敬す

片鏡なら大隈が適任にて候

△明治の初年頃の明治天皇のお側には山岡鉄舟、片岡健吉、吉井友実、高島鞆之助などの豪傑連が侍従として君側に侍して居た、其当時のことである天皇は殊の外蜜柑を御好愛あらせられ常に黄金の珠が房々と生ってる鉢植の蜜柑は九重の奥深き御庭に四時絶えなかつたと承る

△ところが、其蜜柑は時々失くることがあるので近侍の誰かの悪戯ならんと血気盛りの天皇には何時かは此悪戯者を引捉らえてやらんと内々御心に掛けさせられて居たが、仲仲知れぬ

△ところが或日のことである天皇の御座に近き或屋で何やらドタンバタンと音がするので何事やらんと突然明けて見給えば洋服の上着を脱いで剣舞をやつて居た高島侍従は恐懼して、上着を持ち去る暇もなく別室に退いて閉口している、天皇笑い乍ら高島侍従の上着を取上げて御覧あらせられるればポケットから蜜柑は二ツ転がり出たので大笑し給ひ高島侍従は青くなって畏まって居たのが誠に以て滑稽であつたと後々まで近侍に御物語あらせられたそうだ

△モウツは之は高島將軍が陸軍大臣の当時である日或諸大臣始め枢密院の諸氏に御陪食を賜つたことがある、其御席上天皇には殊に御機嫌麗しく種々な御物語あらせられ馬術のことに御物語が移つたところが天皇には高島は陸軍大臣でもあり、又日頃頻りに豪傑振っているから馬術は名人に相違あるまい、一ツ木馬に乗つたらどうかとの仰せがあられたが生きた馬に乗れるものでも木馬に乗るのは仲々六ツ箇しいものだから流石の高島將軍も心中少からず閉口して居たがさりとて乗れぬとも申上げたくないそこで頓智を利かして陛下には時々女官方を木馬に御乗せ遊ばすそうだがどいう風に御乗せになりますかと申上げると天皇には夫は片鏡みに乗せると仰せある、ところで高島將軍片鏡みで御乗せになる木馬なら私の様なものを御意地目にならずとも適當の乗手はあります大隈さんは最も適任者で御座ると申上げたら天皇は非常に御喜び遊ばされ彌が上にも御機嫌麗しく拝せられたと云うことである

伏見に訣るゝ

將軍の柩

十二日正午故正二位勲一等子爵高島鞆之助將軍の柩は伏見觀月橋畔なる第十九旅団長高島友武少將邸を出づ長えに眠れる英雄の靈を納める六尺の棺は、黒布に包まれ上に一個の花環を置き、屈強の人夫八人に依て昇がれ兵士に依て捧げらる歩兵五十三連隊及歩兵三十八連隊より送れる花輪を先導に、棺測には軍服姿の嗣子高島少將並に夫人、クロック姿の女婿樺山満鉄理事並に夫人、高島少將夫人令妹(故將軍の末子)等の血親及大久保大阪府知事、西村天囚氏、村野山人氏其他の故旧付き随ひ、村田歩兵第三十八連隊長以下各將校一同並に河隅伏見署長、歩

42)『京都日出新聞』大正5年1月12日(夕刊)。

兵三十八連隊将校夫人等百余名に送られ、徐々として、工兵大隊の側を御香宮角に出で、夫より御陵道を上りて桃山駅に到り、近親知己の手に依て新しき手荷物貨車に安置せられ上に白布を掩い高島少将夫妻、樺山理事夫妻付き随い一時十三分発の列車にて京都駅に向け発せり、桃山駅には渡辺参謀長、山田軍医部長、二宮法官部長其他幕僚一同（師団長出張不在の爲め不参）並に各隊将校約二百余名奉送せり

みかんのエピソードはみかんが金柑に変化して伝わっているものもある⁴³⁾。

陛下御愛顧のきん柑が枝もたわわに黄色に美しく実ったのを御室に置かれてあった。きん柑は将軍幼少からの好物であり、つい思いは南国の自然に馳せたものか、果た心あつてのことか、見事な実をむしゃむしゃ無断で頂戴した。万事御鋭敏なる陛下早くもそれとお気附かせたまい、将軍を御覧ぜられ『高島、きん柑をやろうか……』。玉音に打たれて、さすがの将軍もこれにはギャフンと参り『イヤ頂戴致しました……』。

蜜柑と金柑の違いがあるが、実際にあったことと推察される。乗馬の件、明治天皇は御付きの侍従、武官等を悍馬に乗せて楽しむという癖があった事は確かである。木馬のエピソードは、その変形であるが、事実であれば深刻である。閣僚の前で陸軍大臣に木馬に乗れということあれば、あまりにも失礼な話でしかないと思われるが、どうであろう。おそらく、このエピソードは明治天皇が侍従、武官等を悍馬に乗せるという話と、高島が大隈ならば悍馬ではなく、女官並みに木馬が似合いだろうといったこと（語ったのかどうか未定である）とが合作されたものと思われる。

この記事によって、さきにふれた友武の住居について、観月橋畔からさらに範囲を狭めることができる。記事には家から桃山駅に到る行程を「工兵大隊の側を御香宮角に出で、夫より御陵道を上りて桃山駅に到り」とある。まさに観月橋のすぐ傍、宇治川の川べりの伏見町に住んでいたようである。

高島終焉の地は、戊辰戦争で、高島が遊撃三番隊の監軍として戦った鳥羽伏見の地でもある。渡辺参謀長は第十六師団参謀長渡辺為太郎騎兵大佐、第十六師団軍医部長山田太良一等軍医正、二宮状太郎第十六師団法官部長である⁴⁴⁾。

大阪朝日新聞の続報である⁴⁵⁾。

故高島將軍の遺骸東京に向かう

故高島將軍の遺骸は將軍永眠の地なる伏見桃山歩兵第十九旅団長高島友武少將の寓居にて十一

43) 橋口 (1932 B) p.68。

44) 『職員録』(甲) 大正4年、pp.491-492。

45) 『大阪朝日新聞』大正5年1月13日。

日夜は家族及び親戚知己旅団司令部副官等に依りしめやかに通夜に明かし十二日午前十時半納棺式の後寝棺に納められ、遺骸は黒布に掩われ正午出棺与丁の手にて同四十分桃山駅に着して馬車に移され旅団司令部歩兵第三十八連隊将校等より寄贈の花輪と共に旭日桐花大綬章は靈前に捧げられ友武少将及び親戚樺山資英氏夫妻日高海軍大将夫人等附添い駅内に見送りの京都衛戍地所在の将校三百余名其他高木紀伊郡長名誉職等百余名の礼拝ありて午後一時二十五分京都駅着それより本線に乗替え二時五十六分東京に向えり尚葬儀は十五日頃東京青山斎場にて神葬にて営む由

続報である⁴⁶⁾。

高島子遺骸着京

入洛中突然脳溢血にて不帰の客となりたる故高島將軍の遺骸は恙なく十三日午前七時五分東京駅に到着せり当日身を刺し骨を徹す酷寒を物ともせず霜を踏んで東京駅に馳せ参じ故將軍の靈柩を迎えたる朝野の名士は川村元帥、松方侯、上原、大迫、伊集院各大将、千田、成田、梅地、与倉各少将、野津侯、松方川崎造船所長、寺尾亨、頭山満、川村伯、園田実徳氏等凡そ三百余名にして遺骸は棺に納められ其上に黒布を覆い其上に五十三連隊、三十八連隊其他より贈られたる数個の花環及び桐花大綬章を置きあり、嗣子高島友武氏及樺山資英氏各夫妻は後方の列車より出で、一同に挨拶したるが柩は余丁の肩にかけられ更に二頭立ての馬車に移し同九時麻布筆筒町なる本邸に入れり同邸は終日自動車、人力車等の訪客引きも切らざる有様なりき尚葬儀は十五日午後二時青山斎場に於て執行すべく葬儀委員長は川村大将副委員長は与倉少将なりと

記事によると、高島の葬儀委員長は元帥川村景明陸軍大将、葬儀副委員長は陸軍士官学校長与倉喜平陸軍少将である。

さらなる続報である⁴⁷⁾。

高島子葬儀 枢密顧問官正二位勲一等子爵高島鞆之助氏の葬儀は十五日午前十時靈前祭を行い嗣子友武氏を首め家族親戚の礼拝あり畢って靈柩は途中行列を廃し青山斎場に護送し午後二時神式により執行し儀仗兵二個大隊の弔砲発射中に埋葬したるが畏き辺りにては午前十時勅使として侍従落合為誠氏を麻布筆筒町の同邸に差遣され左の如く恩賜ありたり

一金五千円 祭染料
一紅白絹 二匹

46) 『大阪朝日新聞』大正5年1月13日(夕刊)。

47) 『大阪朝日新聞』大正5年1月15日(夕刊)。

4

東京朝日新聞に宗像政衆議院議員の談話が掲載されている⁴⁸⁾。宗像は大正6年(1917)12月26日、貴族院議員となる⁴⁹⁾。

▲逸話に富だ人

▽大西郷に心服

『あ、云う豪傑が歿になると世の中が段々寂しくなる高島將軍は大山元帥を措いては陸軍の最古参だ將軍は武弁一方の人ない胆力もあり勇気もある上に却々横着な人であって立派な

▲政治家の器 であつた性格は豪傑と云えば尽きて居る併し思慮とか分別の点に欠けて居た、是が一生不遇に終つた原因である將軍は大西郷に心服して其感化を受けた事は甚だしい戊辰の役には西郷に従つて功があつたが將軍と西郷の間には随分振つた逸話がある曾て西郷が太政官に出仕して居た時分の事何に感じたのか久しく太政官に出なかつた事がある或時西郷は高島を伴て大久保の邸を訪ねた三人は

▲一室に寝転 んで至極磊落な態度で語合つたが席にはカステラが茶菓子として大鉢に盛出て居た大久保は『おい吉』と西郷に呼懸けて『貴公も余り情けないで遇には太政官に出る』と云つたすると西郷は何と思つたかムックリと起上つて巖然として端坐した儘無言で大久保の顔を見ていたが突然『オイ高島帰ろう』と云つてスタスタと出懸けた而して門外まで出ると西郷は高島を振返つて『高島惜しい事をした茶菓子を持って帰るのを忘れて居た貴様最一度座敷に行つてカステラを取つて来い』と命ぜられた將軍も上官の命だからイヤイヤ乍らも座敷に歸つてカステラを取つて来て二人は兵營に歸つて食つたと云う話だ流石の高島將軍も此時許りは些と閉口したと語つた將軍は常に大西郷の事を『何うしても解らない人だ』と云つて南洲の人格を敬慕して居た將軍の直話として西郷は其頃陸軍大將で武威赫々たるものであつたが常に兵營に来て夏など蚊の多い時は高島の蚊帳の中に潜込んで一緒に寝たものだそう又時には暑いものだから縁端に出て毛布を頭から被つて達磨の様な格好で横になつて其儘夜明しをしたものだと話した其後將軍は欧州に洋行した時に独逸の伯林の兵營でビスマルク大宰相が兵卒と同じ靴を穿いて演習の時にも一兵卒と一緒に寝食を共にして居るのを実見して『大英傑と云うものは矢張り似た事がある』と大西郷ヒ公を対照して大に感服して居た將軍の性格の欠陥とも云うのは生一本と云う点である自分が斯うと決心した事は何処までも押徹さねば利かないと云うので彼の伊藤内閣及松隈内閣に陸軍大臣として台閣に列したが爾來今日に至るまで平生を不遇に終つたのも一に此性格に依るものだ大正政変に対して一度は大宰相と擬せられ乍ら遂に終を

48) 『東京朝日新聞』大正5年1月12日。

49) 『官報』(1917)第1622号、p.857。

全うしなかった元老達も將軍を目して『手にオえぬ男だ』として危険物視せられたのが原因かもしれない。事実亦將軍は随分乱暴であった常に子分や壯士を沢山使って時としては無謀に過ぎると思われる事まで敢えてした一見磊落な性で金に懸けては無頓着で景気の好い時は『皆な飲め飲め』と云った調子で借財も随分高んだ様だ一時は鉾山に迄手を出した將軍の財産としては神戸の別荘と麻布に広い地所があった様だが將軍の晩年には麴町紀尾井町の屋敷まで他出に渡して江戸川や麻布に転々された様だ時勢が今日の様にならなくなっては將軍程の豪傑を働かせるの度量が無いのだ而して世間が漸次に寂寥を感じる様になって来る』

高島、大久保、西郷が一堂に会した話は、高島が侍従になる前、明治4年(1871)のことであろう。西郷とともに兵營で寝たという話は、明治2年(1869)か3年(1870)の話であると思われる。

高島は神戸に別荘を持ち、麻布に地所を持っていたようである。神戸の別荘は、第4師団長時代に購入し、神戸市下山手通りにあったと思われる⁵⁰⁾。紀尾井町の邸宅をイエズス会に売って、麻布筆筒町に新たに土地を求めたのではなく、あらかじめ所有していた土地に家を新築して、引っ越したことになる。さらに高島のプロシア訪問時の情報は極めて少ないので、ビスマルクとともに兵營を訪れたという話は貴重である。

頭山満の簡単な談話、『折角時節が来て物になりそうになって来たのに惜しい時に逝ったものだ』が、東京朝日新聞に掲載されている⁵¹⁾。

大野盛郁^{もりか}京都市参与(京都市事業部長)の談話が京都日出新聞に掲載されている⁵²⁾。

●大隈伯の敵高島將軍

故將軍の半面▲犬養氏とは投合

大隈伯が又爆弾を投げられた而し幸いにも命中せず伯は危難を免れた、伯はよくよく運の強い人である、其れについて思い出されるのは故高島將軍の事である。伯にとっては隠然一敵国をなして居た薩派の代表者たる將軍が、何時の間にやら旅の空でポクリと倒れた事なども亦活きた爆裂弾を免れたものとも云ってよからう將軍が伏見の友武少將方に滞留中、国籍の誼を以て数々訪問した大野市参与は語る。私は旧臘伏見の少將宅に訪問した時、將軍は至極元気で種々の話しをせられ、正月も亦遊びに来給えなど云って居られた、其れは気の置けぬ面白い開放主義の人で、誰にでも諄々と説ききかされる、話しをやりかけたら半日でも一日でも立続けにやり通し所謂談論風発と云う有様であった。其の以前にも度々訪問したが何時であったか恁んな話しをして居られた事もあった

50) 『大阪毎日新聞』明治23年7月19日。

51) 『東京朝日新聞』大正5年、1月14日。

52) 『京都日出新聞』大正5年1月13日(夕刊)。

◆大隈は無主義の男 だ、俺が内閣に居た頃も度々大隈とは衝突したが、大隈は初めから責任と云う観念がない、彼の松隈内閣瓦解の時でも大隈は窃かに松方を出し抜いて、自分の味方丈を後に引き残して踏み止まろうとした。そしてその事を先帝陛下に上奏すると先帝陛下は流石に明智にあらせられ、国政は初めから松方と卿に託したのだから松方の上奏がない限りは聞き届くる訳に行かぬ……と仰せられ、遂に御裁可がなかったので大隈は如何ともすることが出来なかった、是れ等の事から考えると、今度の留任位いはやりそうな事だよ 又或時大隈が内閣の意見だとして滔々新聞記者に話した事があったが、俺等は「开んな意見なら賛成出来ぬ」……と云うとそんなアレは何時でも取消すと云って即座に変節した事があった、恁んな事は大隈にとって朝飯前の事だ、実に無主義、無定見の男だ、アンな遣り口で国政を料理せられては耐ったものでない……と甚く憤慨せられて居た事もあった

◆犬養、尾崎、兆民 も俺は昔から友達としてやって来た而し、尾崎はアレ丈けの人間で常に名利を念として居るから駄目だ、犬養は何と云っても一枚上だ、今日まで実に簡単相照らして往来して居る又中江篤介（兆民居士）が大阪に浪人して居る頃其の宅に行くと、珍らしい大きな軸物が掛けられてある見ると兆民の自筆で「大阪に過ぎたる者二人あり、高島將軍と中江兆民」……と書いてあったので呵々と大笑いしたことがあった……など無邪気な昔語りに耽られて居た、將軍は金銭に淡泊で大勢な浪人者などを養い面倒を見ることを何とも思われなかった、それで先年紀尾井町の大邸宅を売って市兵衛町に小さな家を買われて今はそれが本宅になって居る、薩派を中心とした人物及び浪人組に人気のある所は何と云っても將軍を第一に推さねばならぬ。行き詰った際には随分局面を展開する大手腕を振う事が出来る大立者であったのに実に惜しい事をしたものである

□家庭に於ける

革丙將軍

▲將軍は軍人として世に知らるゝ外家庭の人であり又徳望の人であった平常は余り旅も好まず友人に獵などをすゝめられてもまだ一羽の鳥をも打ち落した事はない十年前に夫人がなくなってからは三女あい子嬢（三十一）と二人淋しく執事下男下女を相手に家庭で物静かな日を送って居た

▲軍人に似合わず酒は若い時から全く飲まない食事なども極めて簡素で料理番の拵える食事に一度も小言を言った事がない食物には別に変わった嗜好もなく庭を造ることが好きで雨の日には本を読んだり字を習ったりして無聊を慰めた本は大概支那のものを好んで外国のものは全く読んだ事がない字は王羲之の書風を愛しその手本を放さなかった

▲日頃特に郷里の人に親しみ同邸にはいつも四五人の青年を世話して居た「是非將軍でなければ」と云って金に困った連中はよく將軍に証文の判を捺させたそれを將軍は悦んで捺したそれが為め子は晩年思いがけない多額の負債を負た

▲長女つか子（四十）は嗣子友武氏の夫人二女こま子（三十一）樺山満鉄理事の夫人三女あい子

は親戚徳永家に嫁いだが先頃訳あって離縁となり家事を助けて居た孫は一人もなかった葬儀等はまだ定まらない

大野盛郁の談話は高島の政治上の一面と家庭での一面を伝えてくれる。第4師団長時代に中江兆民と交流があったようである。

高島の家族についての談話に誤りが多いのが不思議である。3女愛子は、妻春子の生前に徳永重康と結婚し、二人の子供である初子は明治36年(1903)9月に生まれている。明治37年(1904)10月19日、春子が亡くなってから、友武が近衛連隊長に補せられる明治41年(1908)までは、高島はひとりである。記事では離婚を「先頃」としているが、徳永重康と愛子が離婚するのは、明治43年(1910)以前である⁵³⁾。これ以降、高島は少なくとも愛子、初子親子とともに暮らしていた可能性は高い。友武が歩兵第19旅団長となる、大正3年(1914)以降、高島と愛子、初子親子の三人暮らしと思われる。愛子が嫁いだ先を「親戚徳永」と報じているので、徳永家は高島の親戚(高島の叔父に徳永姓がある)ということになる。ただし、徳永重康は吉原重隆の2男である。

「長女つか子(四^十年)」、「二女こま子(三^十年)」、「孫は一人もいなかった」は間違いである。長女多嘉子満42歳、三女球磨子満35歳が正しく⁵⁴⁾、球磨子にも愛子にもこどもがいたのでこのときすでに高島には孫がいた。

大野も、高島は酒を飲めないと証言している。興味があるのは、庭づくりが好きとある。山県有朋の庭づくりは有名である。山県の場合はまさしく作庭で本格的なものである。高島の庭づくりがどの程度のものであったかわからない。

さらに京都日出新聞に次のような記事が掲載されている⁵⁵⁾。

●革丙將軍と

祇園美人

◆故高島革丙將軍は維新当時より京都には頗る縁故の深い人であった將軍は大西郷が鹿児島に兵を挙げる以前などは彼の桐野利秋等と供に祇園町へ出入して居った其の当時は随分に乱暴な三十前後の歳であったの真葛ヶ原等で赤い長い刀を腰に差して歩いた土佐の藩士などと喧嘩をして相手方を真二つに切った事などもあったこんな時に引張られて歩いた芸舞妓などは慄い上って居ったそうである

◆是れ等の話は將軍が常に後輩に語って笑われた所である將軍の三十四歳の時即ち少將時代に彼の大西郷の反乱が故郷に起り此の戦の鎮定後は將軍は別人の思いがする程に身を慎むよう

53) 『東京朝日新聞』大正5年1月19日、理学博士徳永重康早稲田工手学校長の妻徳永もと子(三十歳)が明治43年に結婚したと報じている。

54) 球磨子はこの時期、「久満子」と資英が上原勇作に出した手紙に記している。上原勇作関係文書研究会編(1976) p.159、pp.164-165。

55) 『京都日出新聞』大正5年1月14日(朝刊)。

に成られたが其後内閣に入って陸軍大臣と成ってから又々若い美人と盛に浮き名を流された

◆将軍は他の大官とは少し毛色を異にして居ったので非常に奇抜な事を平気でやったものだ祇園の中村楼の玄関から馬車で宿に帰るのに宴席に侍って居る芸舞妓と同乗で京の町を馳られることも珍しくなかった川勝歌蝶などは未だ当時可愛い十三四歳の赤襟であったが将軍は其の当時から歌蝶に特別の思召があったので中井弘さんなどもよく一所に遊ばれたものだ将軍と歌蝶との間を取り持ったのは北垣国道男であるそうだ

◆若い未だ壮士のような時代には大酒をやったものだが此の頃は僅かな酒で酔われた而して青楼で歌うて騒ぐより花札を盛んに引かれたこれが将軍の最も喜ばれる遊びであった

◆陸軍大臣に成られても一向に金の無い人で何時も貧乏であったが金費いは美しいかった当時の桂太郎さんなどゝは雲泥の差である昔から薩長の名士を比較すると薩摩の方の人が何うしても花街では美人に受けたもので高島将軍の如きは特に芸舞妓仲間に持て囃されたものであった

高島は弘化元年（1844）生まれなので、明治元年（1868）であれば、満24歳である。したがって、二十歳前後が正しい。刀は朱鞘を好んでいたようである⁵⁶⁾。ただ、ひとを切った事はないと高島本人が断言している⁵⁷⁾。

又た人一人も斬って事もない。白刃一揮、首をブチ斬るのは、或いは愉快かも知れんが、併し罪悪じゃ。我輩はかつてそんな罪悪を犯した事はない。

高島が花札を好んだことは確かなようである。高島だけではなく妻春子ともども花札を愛好したことを岩崎俎堂が「高島鞆之助夫人」で紹介している⁵⁸⁾。

中井弘とは同郷であり、高島と東京でおなじ兵舎に寝泊まりしている。高島が第4師団長の時には、中井滋賀県知事の家をしばしば訪問している。北垣国道も高島が第4師団長の時の京都府知事であるとともに、高島の心酔者である。当時、二人はよく行き来している。

ここでも「大酒」ということばが使用されているが、まったくの誤解である。高島はお酒を飲めない。

高島が亡くなった直後の談話であり、話し手の間違った記憶等もあって、各人の内容が一致しないところもある。高島の評価例として、高島と大山巖とを比較した三宅雪嶺の評価を引用する⁵⁹⁾。

大正五年、大山巖と高島鞆之助没す。死する頃、二人の間に位置の大差あり、一は公爵にして

56) 橋口（1932 A）p.42。

57) 田中編（1909）p.202。

58) 岩崎（1903）pp.43-48。

59) 三宅（1939）pp.263-264。

元帥、一は子爵にして後備中将、優劣の判然たるが、元と斯くまでの差異なく、高島の方が鈍物大山よりも飛躍すべきやに待ち設けられたり。西南役に大山は少将、高島は大佐として出征せしも、高島は計画の宜しきを得、戦役中に少将に昇進せり。後第四師団長たりし頃、東西に往来するものは京都の重鎮として之を目し、西郷の後継者は此人なりと言ひ声望一世に高し。然るに陸相に進むに及び、殆ど事毎に志と違ひ、爾来常に政界に腕を伸ばさんとし、入閣もしながら、遂に見るべき事なし。山本が首相と為らずんば、彼れ或は其職に当りたらんも、山本に圧倒されては事知るべきのみ。嘗て希望を囑せし者をして深く失望せしめたり。大山は特殊の能力なきも自ら知るの明あり、易きを易しとし、難を難しとし、常に適所に居るを期し、位置の高まれば之に相応して修養し、日新の軍事知識を吸収するを怠らず。詳かに知る所なきも、大体に於て理解し、少くとも理解するに努め、而して敢て理解を示さんとせず。高島は絶えず何事かを企て、実に寧所なけれど、才幹を待みて修養を欠き、陸相と為りてより二十余年間、何の進境なく、唯だ鷄鳴狗盗の雄たるに止まり、其れさえ資力に窮して思わしからず、或いは貧して鈍せりと噂せらる。金錢に淡白なるか、利せんとして損せしか、孰れにしても蓄財せざるは西南役後の薩人に珍らしく、西郷に私淑せるの偶然ならずとせんが、豪傑の資ありて落拓せるは惜むべし。

最後に、高島の臨終前後の様子をまとめておく。

大正5年(1916)1月9日 数日前から下痢で臥床する。

10日 午前4時胃痙攣をおこす。堀部二等軍医正往診する。

午前8時頃、小康状態となり堀部二等軍医正帰宅する。正午頃脳溢血をおこし、危篤状態となる。

11日 午前中、両陛下の御使い京都主殿寮出張所長日野西資博がお見舞い。

午後1時30分、正二位に叙せられ、旭日桐花大綬章を授けられる。

午後2時薨去。通夜をする。

12日 午前10時30分納棺式、正午出棺する。12時40分桃山駅到着。午後

1時25分京都駅着、午後2時56分京都駅出発。

13日 午前7時5分、東京駅に到着する。午前9時麻布筈笥町の自宅に着く。

15日 午前10時勅使侍従落合為誠が差し遣わされ、霊前祭をおこなう。午

後2時、青山斎場で神式により葬儀を行う。葬儀委員長川村景明元帥、副委員長陸軍士官学校長与倉喜平陸軍少将。

参考文献

天野利武編(1968)『八十年志』学校法人追手門学院。

- 稲村徹元・井門寛・丸山信編（1972）『大正過去帳』東京美術。
- 岩崎徂堂（1903）『明治大臣の夫人』大学館。
- 上原勇作関係文書研究会編（1976）『上原勇作関係文書』東京大学出版会。
- 大植四郎編著（1971）『明治過去帳』新訂，東京美術。
- 『大阪朝日新聞』明治22年1月15日，大正5年1月11日（夕刊），1月12日，1月13日，1月13日（夕刊），1月14日，1月15日（夕刊）。
- 『大阪毎日新聞』明治23年7月19日，大正5年1月11日（夕刊），1月12日（朝刊・夕刊），1月13日（朝刊・夕刊），1月15日（夕刊）。
- 小沢健志（1997）『幕末・明治の写真』ちくま学芸文庫。
- 霞会館華族家系大成編輯委員会編（1996）『平成新修旧華族家系大成』上・下，吉川弘文館。
- 『華族女学校年報』第1年報－第7年報（明治18年－明治24年），華族女学校。
- 樺山資英伝刊行会編（1942）『樺山資英伝』樺山資英伝刊行会。
- 『官報』（1916）第1031号，大正5年1月12日。
- 『官報』（1916）第1035号，大正5年1月17日。
- 『官報』（1917）第1622号，大正6年12月27日。
- 己黒子（1910）『洗髪のお妻』全文館。
- 京都市（1975）『京都の歴史』8，株式会社学藝書林。
- 『京都日出新聞』大正5年1月12日（朝刊・夕刊），1月13日（夕刊），1月14日（朝刊）。
- 『明治人名事典』（1987）上巻，（株）日本図書センター。
- 『職員録』（甲），印刷局，大正4年。
- 『職員録』（乙），印刷局，大正4年。
- 『職員録』（甲），印刷局，大正5年。
- 女子学習院編（1935）『女子学習院五十年史』女子学習院。
- 杉謙二編（2011）『華族画報』下，吉川弘文館。
- 月亭生（1932）「京都三日」『三州』第13年第4号，三州社，pp.13-17。
- 名古屋偕行社編（1909）『明治三十七八年戦役実話 精神教育資料』名古屋偕行社精神資料発行部。
- 橋口西彦（1932A）「革丙將軍の横顔（一）」『三州』第13年第4号，三州社，pp.38-42。
- 橋口西彦（1932B）「革丙將軍の横顔（三）」『三州』第13年第6号，三州社，pp.67-71。
- 橋口西彦（1933）「緑陰茶話」『三州』第14週，第6号，三州社，pp.34-46。
- 高島鞆之助謹話（1912），「神武以来の英主」『太陽』臨時増刊，18巻13号，pp.32-37。
- 高嶋弥之助編（1938）『島津久光公五十年祭献詠集』前書き。
- 田中萬逸編（1909）『死生の境』博文館。
- 『東京朝日新聞』大正5年1月12日，1月19日。
- 福川秀樹（2001）『日本陸軍将官辞典』芙蓉書房出版。
- 三崎一明（2012）「鹿兒島紀行－高島鞆之助の生誕地を訪ねて－」『追手門学院大学教育研究所紀要』第30号，pp.47-63。
- 三宅雪嶺（1939）『人物論』千倉書房。
- 『明治人名辞典』（1987）上下，（株）日本図書センター。

（付記）引用文について、カタカナをひらがなに改めた箇所、仮名遣いを新仮名遣いに改めた箇所、漢字を当用漢字に改めた箇所がある。また引用文にある振り仮名、返り点を省いている箇所、繰り返し記号、句読点、文字の大きさを改めた箇所がある。さらには記号等について省いた箇所もある。

引用文中の□は、判読不可能な文字あるいは脱字の箇所である。